



リシンク

☆

この街から、Rethinkして未来を変えていく。



★

街の課題を、考える。話し合う。

そこに住む方々、そこで働く方々、そしてそれを支える自治体の方々と一緒に。

それは、よりよい明日のために。

Rethinkフォーラムは、地域にゆかりのある方や、テーマにピッタリなゲストをお招きして、

地域社会の課題解決に向けたディスカッションをする場。

☆

ちょっとだけ視点を変えてみることで、違った景色が見えてくるかもしれません。

この先も、この街が魅力的で活気にあふれるように。一緒に、Rethinkしませんか？

☆

★

☆

☆

☆

☆

Rethink
PROJECT

テーマ

Rethink 長崎

～チャレンジを応援する長崎・魅力ある長崎県づくりへ～

Rethink長崎～チャレンジを応援する長崎・魅力ある長崎県づくりへ(長崎新聞社主催、Rethink PROJECT協賛)が7月、長崎市で開かれました。県内外の多方面から選ばれる「新しい長崎県」の実現に向け、さまざまな立場のみなさんが、地域の魅力向上、課題解決を進めています。長崎県知事の大石賢吾さんや長崎刺繍の継承、発展に取り組む嘉勢路子さん、「儲かる農業」を目指し雲仙市小浜町に移住、起業した上村威さんらと「Rethink」した座談会の要旨を紹介します。

出席者

モデレーター



大石 賢吾さん
長崎県知事

1982年生まれ。長崎県五島市出身。千葉大学大学院医学研究院博士課程修了。2020年厚生労働省室長補佐(新型コロナウイルス対策推進本部医療班業務)。21年日本医療研究開発機構事業推進課長。22年から現職(1期目)。



上村 威さん
株式会社朋会 代表取締役社長

1997年生まれ。京都府出身。長崎大学多文化社会学部卒。光学測量機器メーカーや農業スタートアップ企業を経て、2025年静岡県から雲仙市小浜町に移住。同年から現職。



嘉勢路子さん
長崎刺繍再発見塾塾長

1958年生まれ。長崎県出身。福岡女子短期大学音楽科卒。音楽教室講師を経て86年刺繍職人の嘉勢照太さんと結婚。97年長崎刺繍の教室を設立。2002年から現職。05年長崎歴史文化博物館体験工房開設。



長谷川 学さん
日本たばこ産業株式会社長崎支社長

1973年生まれ。千葉県出身。県立四街道高等学校卒。1992年日本たばこ産業入社。横浜第四支店長、神奈川支社営業部長などを経て2025年から現職。



大杉 和広
長崎新聞社メディアビジネス局長

1967年生まれ。長崎県諫早市出身。福岡大学経済学部卒。90年長崎新聞社入社。販売部、整理部を経て2019年販売局長、25年から現職。

「地方では「無理を
地方こそチャンス」に

「大杉」多方面から選ばれる新しい長崎県の実現に向け県が取り組んでいる施策を教えてください。

「大石」知事就任以来、県政運営に新たな視点や発想を取り入れながら、選ばれる、新しい長崎県づくりの実現に向け、さまざまな施策の推進に力を注いでいます。Rethinkという観点から一例を挙げると、本県の7割が離島・半島地域という地理的課題があります。そこに着目し、ドローン活用を緩和する全国初の「新技術実証連携」絆、特区の指定を受けました。ドローンサービス事業者による医薬品の配送、インフラ点検などの実証調査など、全国に先駆けた取組みが進んでいます。県としての魅力を高める大きな挑戦です。

もうひとつは人口減少の中、行政区域外から物や人、資金も含めてしっかりと集めることで働く場が増え、所得が増え、そこで暮らす県民の生活の質も上がっていく。あらゆる政策を通し、選ばれる長崎県になるよう引き続き力を注いでいきます。

「大杉」日本たばこ産業「Jグループ」の地域貢献への考えや、県外出身者の長谷川さんから見た本県の印象を聞かせてください。

「長谷川」Jグループは社会課題の解決に向けた新たな視点で考える「Rethink PROJECT」を全国で展開しています。その一環で「ひろえは街が好きになる運動」は「ひろえ体験を通じて、すてな心」を育てたいと願っています。

また、本県は全国でも屈指の葉たばこの産地。当社の大切なパートナーであり、長きにわたるたばこ文化を支えていただいております。「大杉」チャレンジを支える県施策についてお聞かせください。

「大石」例えば、知事就任以来「スタートアップ」(新興企業)支援に力を入れています。地域課題の解決につながる民間のチャレンジを行政としてしっかりと応援していく考えに立ち、投資家とスタートアップのマチンクイベンチュアと企業Nagasakiを開発・資金調達やアイデアの事業化を支援しています。

50年前には本県製造品出荷額の4%だった半導体産業は、2022年度に全体の20%、3203億円を占めるまでに成長しました。2030年度の売上目標を1兆206億円に設定した「長崎半導体産業成長戦略」掲げ、県内企業の設備投資や人材確保を支援しています。同じく、航空機関連産業も成長が期待できます。長崎県の海洋線の長さは全国2位、島の数は149と日本一です。本県の基幹産業である造船・フット関連、洋風発電といった海洋エネルギー、水素関連産業にも可能性があります。各産業の取り組みについて、若い世代やこれから長崎でチャレンジしたいという皆さんに伝え、長崎の誇りになるよう支えていきたいです。

一次産業も本県を代表する産業。省力化、省人化につながる技術を活用した所得向上の取り組みを進めています。

「大杉」上村社長は、地方から売れる農業をつくり出すという信念のもと、一次産業のスタートアップを立ち上げました。チャレンジの理由や思いを語聞かせてください。

「上村」地方では無理を、地方こそチャンスに変えよう。学生時代を過ごした長崎に戻りました。雲仙の豊かな自然や気候は一次産業にとって大きな可能性を秘めています。西の果てはを返す。他の産地が出荷する前つまり高値で取引されるタイミングで出荷できる優位性があります。戦略的に力ボチャをメインに育てています。

大石知事から、地域の所得向上の話がありましたが、農業を通して地域の所得を増やすことが地方創生の鍵だと思います。大学で農業を学んだ学生が一次産業に飛び込み、データに基づいた振れ幅が少ない農業を確立できれば収入増につながります。私は耕作放棄地を再生し、起業したばかりですが、小売店への直接営業や海外への輸出で売れる仕組みを構築している最中です。5年、10年と農業の循環を築き、所得を上げ、若者にも選ばれる産業にする挑戦を続けます。

「異国との交流で生まれた
町人文化の証「長崎刺繍」

「大杉」ながさき町人文化祭2022が9月14日から11月30日まで開かれます。皆さんのご期待を聞かせてください。

「大石」今年には被爆80年、長崎県美術館や長崎歴史文化博物館の開館20周年、中華人民共和国駐長崎総領事館開設40周年など本県にとって大きな節目、あらためて平和の大切さを考える機会や、海外との交流促進、そして共生社会の実現にもつながると考えています。県内各地で80を超えるイベントがありますので、県民の皆さんも足を運び、楽しんでいただきたいと思います。

「長谷川」Jグループは企業ハバースとして「心の豊かさをもつ」を掲げています。心の豊かさ、平和や文化は切り離せないものです。さまざまな文化に触れることは人の心の幅や興行をを広げてくれる重要な要素のひとつだと考えています。ハバースについてはその趣旨、意義ともにJのハバースを通じて、そこがあらと感じており、長崎に拠点を構える企業として「ふるさと納税」という形で文化祭に賛同しています。

「嘉勢」ハバース文化祭期間中には参加者に文化祭のロゴマークを刺繍してもいい、最終的に平和を願うオアシエを創作する体験や、8年前から制作している長崎刺繍をふんだんにあしらったオアシエ、様々な夫人の衣装の披露などを企画しています。30年前、長崎刺繍は「途絶えた」と認識されていたが、実は戦後一軒の刺繍店が技を繋ぎ、夫の嘉勢照太が弟子入りしたことで存続できました。長崎刺繡



は、あくまでもに欠かせない伝統工芸。江戸時代から続く先人が残してくれた地域固有のブランド。一人の作家が成し得たことではなく、鎖国時代に異国文化との交流の中から生まれた町人文化の証です。創作当時の街の盛りやにぎわいを感じることができます。過去から現代未来へ残すべき大切な文化だということを文化祭を通して伝えたいです。

「挑戦の意志に応える
仕組みづくりを

「大杉」長崎をより良くするために、視点を養って考える。観点から皆さんのご意見を聞かせてください。

「嘉勢」長崎刺繡という立ち位置から考えると、子どもたちに刺繡を体験してもらうこと。今の子どもたちにはたぶん、その外からの刺激があるけれど、自分の中から湧き出てくるものだったり、一生涯やるエネルギー、たっぷり、生きる上では精神的なものが大切。刺繡体験を通じて子どもたちに伝え、感じてほしいです。

「長谷川」物事の裏側と表側を両方から眺めてみる。それがRethink。困っていることが、不便に思っていることが、全く別の立場に立てば解決策が浮かぶこともあります。ただ、そこをマッチングするのは難しく、今日のフォーラムのような場が誕生すればいいと思っています。Jグループも企業として両者を繋ぐハブの役割を果たし、地域をより豊かにしていきたいです。

「上村」農業分野で言えば、起業環境の整備として「観光と連携した関係人口の創出」地方に移住し、農業に挑戦したいという若者が最初になつかれるのが、農地が借りられないというハードルです。私が暮らす雲仙市小浜町は温泉地としての魅力と、自然と共生する農業が営まれてきた地域。体験型観光で関係人口を拡大し、インターンターが生まれる流れを地域の中に育て、「無理がチャンス」に変える地域。県民の挑戦の意志に応えられる仕組みづくりこそがRethinkの核だと思います。

「大石」長谷川さんがおっしゃったように、困っている人のケミストリーが物事を前に進める力になる。村さの農業と観光の連携も、掛け合わせること、地域課題の解決が高まっていく、というお話は非常に刺激的でした。嘉勢さんの刺繡体験の話からは、以前精神科医として働いていたことを思い出しました。子どもたちにとって何かに没頭する時間は人間形成の中で大切なこと、芸術や文化はビジネスだけでは測れないものがあります。先人たちが紡いできた長崎刺繡をさらに広めてほしいですね。

行政の立ち位置はみなさんをつなぐこと。目の前の課題を憂うだけではなく、慮まれている「長崎の宝物」を認識しながら掛け合わせる。地方として国に助けてもらっているだけではなく、地方は地方として自立し、魅力を世界に自慢している県にしています。26年度から5年間の本県の方向性を定める総合計画策定中です。人口減の難しい局面ですが、県民のみなさん、ふるさとに誇りを持っていただくことに「思いをつ」につなぐ。素晴らしいな」という姿を描き、県内外の多方面から選ばれる「新しい長崎県」を実現したいと思っています。